



3月号

# ひだまり

今月のエッセー

## 交流

昨年のことです。産経新聞を眺めていると、こんな記事を見つけました。

「供養の習慣 心優しい子育て」  
 おやつと思つて読みすすめていくと、そこには日本香堂が実施した「子ども達の供養経験とやさしさの関係性」についての調査結果が掲載されていました。どうやら、その結果から、墓参りや仏壇を拝む「供養」を習慣化している子供は、他人を思いやるやさしさをもつという傾向があることが分かったそうです。

「道徳教育の強調よりも、具体的に祈る行為のほうがやさしさや思いやりを醸成し、高めることを暗示している」。

教育評論家の尾木さんの分析で記事が締めくくられていました。

先祖を弔う「供養」を通して、感謝の気持ちが生え、他人を思いやるやさしさを持つことができる。そんな風にいわれると、「供養」はなんて素晴らしいものなのだろうか、と感心してしまいます。

しかし、よくよく考えてみると、そうやって訴えなければならぬほど、「供養」の習慣が減ってきているということなのかもしれません。お盆になれば祖父に手を引かれ、一緒にお墓参りに出かける。そんな当たり前だった風景が、時代の変化とともに当たり前ではなくなってきた。もつと言えば、「供養」を通して行われる家族の「交流の場」がなくなってきた。そう考えると、なんだか少し寂しい気持ちになります。

この記事は「供養」だけに注目していましたが、大切なのはそんな「交流の場」があるかどうかではないでしょうか。みんなで一緒になつてご先祖様に手を合わせる。そんな家族との関わりのおかげで、子供たちは人を思いやるやさしさを育んでいくのです。

◆竹村信彦

## 「随喜」 ずいき 仏教のことば

今回ご紹介するこの言葉は「法華経」というお経に出てきます。

「随喜」とは他人の幸せや喜びをそれがまるで自分のことであるかのよう共に喜ぶことです。

例えば、自分に何か嬉しいことがあった時、その喜びに共感してくれる人がいたら、その人に好意を懐くでしょう。そして、喜びに共感してくれた人に嬉しいことがあった時には、自分もその人の喜びに自然に共感できます。他人の喜びを自分のことのように喜ぶ。それはやがて自分にも喜びとなって帰ってきます。それが随喜の功德です。



しかし、時として私たちは他人の喜びを素直に喜べず、それどころか羨んだり、嫉妬したりすることがあるでしょう。どうしても自分と他人を比較してしまうからです。

「自分はある人よりも劣っている」  
 そのような嫉妬心はやがて恨む気持ちへと変わって行きます。それが行き過ぎると、敵意となって相手を傷つけることになってしまいかねません。

相手を恨むのか、それとも共に喜ぶのか、みなさんはどちらを選びますか？

◆國生徹雄

## 編集後記

立春も過ぎ、徐々にではありますが春の気配が感じられる季節になって参りました。

思い返してみますと、この一年もあつという間でした。  
 私は今年で三十二歳になりますが、年々、時が経つスピードが上がっている印象です。

このままスピードが上がっていくと、どうなってしまうのか不安もありますが、だからこそ一日一日を大切に過ごしていきたいと思えます。

また、四月からルンビニ合掌苑の皆様とお会いできることを楽しみにしております。それでは、また。

◆田中仁秀

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門  
 〒一〇五・八五四四  
 東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内  
 ☎〇三・三四五四・六八四四

『わんぱくな3年学生』



早いもので、皆さんと初めてお会いしてから三年が経とうとしています。初めてルンビニ合掌苑を訪問した時のことを思い返してみると期待と不安でとても緊張していたのを覚えています。司会や法話を担当した時も緊張してしまい、結局最後まで上手く話せませんでした。いつも温かく見守っていただきとても感謝しております。お昼の時間も皆さんのおかげで楽しく過ごすことが出来ました。ここでの皆さんとの出会い、学び、そして皆さんの思い出をこれからも大切にしていきたいと思っています。ありがとうございます。合掌

◆ 國生徹雄

思い返してみれば、福井県にある永平寺での修行を終え、はじめて法話をさせていただいたのが、このルンビニ合掌苑でした。

緊張してばかりで、話し終えた時にはちゃんと伝わっただろうかと不安に思っていた私。そこへ在苑者のお一人が、「今日の話よかったよ。これからもがんばってね。」と声をかけて下さり安心したことを、今でもよく覚えていています。

ここで経験させていただいたことを支えとして、これからも精進してまいりたいと思います。三年間、誠にありがとうございました。合掌

◆ 竹村信彦

私のだからもの

『ライブDVD』

先日、実家に帰省した際に部屋を掃除していたところ、DVDが出て参りました。

ん？何かな？とパッケージを開いてみたら、「追い出し1」「追い出し7」「追い出し9」の三枚入りでした。

一瞬何のことか分かりませんでした。すぐに記憶が甦ってきました。

(ああ、大学時代の音楽サークルか！)

DVDは私が大学四年生の最後、卒業ライブの記録でした。

部屋の奥底に眠っていた、たからものとの十年ぶりの再会に少しばかり期待しながら、ライブの様子を見てみることに。

(・・・)

これは、恥ずかしい。

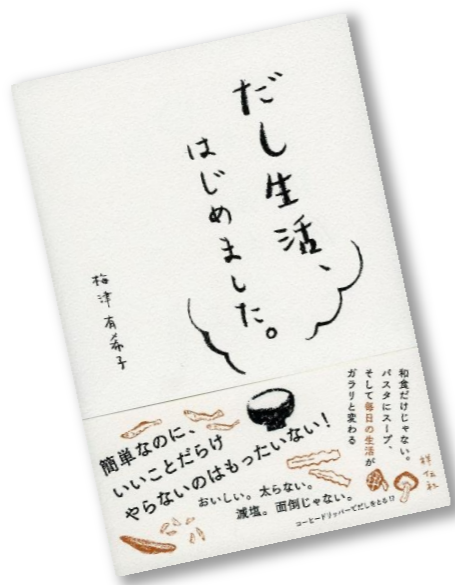
映像に映っていた自身の姿は若々しく、髪がまだフサフサで、仲間と楽しくドラムを演奏して青春を謳歌していました。

時間の経過と色あせせずに思い出を保存してくれるたからものへ感謝。

◆ 田中仁秀



ひだまり書房



『だし生活、はじめました。』 著 梅津 有希子

日本の大事な食文化『和食』。それが世界に認められ、ユネスコ無形文化遺産に登録されたのは記憶に新しいかと思えます。その和食を陰から支える、縁の下の力持ち的な存在が『ダシ』です。

今は昆布やカツオ節などを実際に使ってだしをとることはほとんどなく、手軽な「ダシの素」が一般家庭に普及しています。著者の梅津さんも長い間、手間のかかるだしはとらず、ダシの素を使って料理をしていました。

しかし、ある時、母親が作ってくれただしのきいた年越しそばに衝撃を受け、だしに対する考え方を考える様になりました。そこから興味を抱き、だしの取り方から素材のことまで細かく調べるようになったのです。そんな、「だし」の様々な良い所を見つけ出していく過程が丁寧に書かれています。

◆ 伊藤正法